

日本における柳宗元集について

(二〇二二年九月一日受理)

(国語教育講座) 太田 亨

はじめに

(一) 日本に将来した柳宗元集

日本に柳宗元集が何時伝わったかは定かではないが、主に円爾弁円(一一〇二〜一二八〇)が持ち帰った書籍を目録にした「普門院経論章疏語録儒書等目録」に柳宗元集が伝わっていたことが記されている。当時の入宋者・入元者にとつて大陸の文物を持ち帰ることは一つの大きな任務であり、特に漢籍に対しては多くの日本人が関心を寄せた対象であった。柳宗元の別集についても、様々な種類の柳宗元集が将来されたであろうことが想像に難くない。

日本に伝わった柳宗元集は多く存在する。中には今となっては日本でしか見られない柳宗元集もある。ここでは特に注目される柳宗元集を取り上げる。

本稿では、日本においてどれほどの種類の柳宗元集が現存しているのか、それぞれの柳宗元集にどのような特徴があるのかを検証する。その際に、(一)日本に将来した柳宗元集、(二)中国から移入して日本で書写、出版された柳宗元集、(三)日本で創出された柳宗元集、(四)日本の書物に書き記された柳宗元集、と大きく四分類し、それぞれの主だった柳宗元集の概要について詳述する。ただし、何れの場合も、近代に至るまでの柳宗元集を対象とする。

①『唐柳先生文集』(宋版・三十三卷本)
静嘉堂文庫と文化庁にそれぞれ端本が所蔵される。静嘉堂文庫に所蔵される端本(以下『静嘉堂蔵本』と略称)については、全一冊。『静嘉堂宋元版図録解題篇』(静嘉堂文庫・一九九二)に次のようにある。

〔寸法〕 二七・三×一八・六糎

〔序目〕 (末尾に跋) 嘉定改元(一一〇八)十月 日郡守鄱陽汪檝跋

〔版式〕 左右雙辺(一一・六×一四・二糎)有界 每半葉九行 每行一七乃至一九字 注文双行 版心白口 双黒魚尾 刻者姓名 大小字数

〔宋諱〕 玄驚弘殷胤恒貞懲讓煦桓慎

〔刻者姓名〕 寅 義 傑 山 召 春 仁 正 詮 文 林

備考

残存巻数 卷二九第一—二丁・卷三二第九—一八丁表・外集第一丁

裏—二九丁表・跋文末裏半丁 蔵書印 金沢文庫 松方文庫 島

田翰読書記 竹添井々旧蔵書

文化庁に所蔵される端本(以下『文化庁蔵本』)については、全二冊。一冊は、卷十四「説」全二十葉・卷十五「弔賛箴戒」全九葉・卷十六「序上」全十五葉・卷十七「序中」全二十葉・卷十八「序下」始めの三葉のみで構成され、一冊は、卷二十九「状」第三丁より後の十五葉・卷三十「啓」全二十一葉・卷三十一「非国語上」十八葉(第十五丁・十六丁闕)・卷三十二「非国語下」始めの八葉のみ・『外集』第一丁表及び第二十九丁裏より後の六葉・「後序」十二葉で構成される。

柳宗元集は源流をたどっていくと、劉禹錫が最初に柳宗元の作品集を編んだとされ、三十巻本であったといわれている。それは、宋刊の『劉禹錫集』に「編次為三十通」とある事によって分かる。しかし、陳振孫「直齋書錄解題」と張敦頤「柳先生歴官記」には三十二巻本であったとされ、沈晦「四明新本柳文後序」と乾道三年(一一六七)に陸之淵が書いた「柳文音義序」には三十三巻本であったとある。この巻数の違いを解決するために、現存する『文化庁蔵本』と『静嘉堂蔵本』を照らし合わせてみると、もとの三十巻本は「非国語」と外集を含んでいない場合であり、それに「非国語」が加わった場合が三十二巻本、さらに外集一卷を含めた場合が三十三巻本であることが分かる。『文化庁蔵本』と『静嘉堂蔵本』は柳宗元集の源流を示す貴重な価値を有している。

他に三十三巻本の痕跡をとどめるものとして、乾道元年(一一六五)刊『唐柳先生外集』(北京図書館所蔵)が存在する。この書と『静嘉堂蔵本』の関係について、清水茂氏は「日本留下来の兩種柳宗元集版本」(『香港大學馮平山圖書館金禧紀念論文集』一九八二年)の中で、ともに葉程の跋を存していることから同一種の版本であると、字に異同が見られるのは、『静嘉堂蔵本』外集

末にある汪楫の跋にあるように、古くなり腐った版木や誤字を改めたためだという。

『文化庁蔵本』と『静嘉堂蔵本』のそれぞれの巻における作品については、戸崎哲彦「南宋永州刊『唐柳先生文集』三三巻本初攷」(『島大言語文化』三九号、二〇一五)に詳しい。表にすると以下ようになる。

巻・部類	所収作品
卷十四 説(如説者附之)	天説・車説贈楊誨之・鶻説・鰲説・捕蛇者説・示十昔説・朝日説・乗桴説・復吳子松説・謫龍説・読韓愈毛穎伝・吏商・鞭賈・觀八駿圖・東海若
卷十五 弔賛箴戒	龍馬圖贊・伊尹五就桀贊并序・梁丘據贊・霹靂琴贊并序・尊勝幢贊并序・懼箴・憂箴・師友箴・三戒并序(臨江之麋・黔之驢・永某氏之鼠)・敵戒
卷十六 序上	崇豐二陵集礼後序・西漢文類序・濮陽吳君文集序・愚溪詩序・同吳秀才武陵贈李睦州詩序・楊評事文集後序・王氏唱和詩序・陪永州崔使君遊宴南池序・婁二十四秀才花下詩序・法華寺西亭夜飲賦詩序・送元十八山人序・送豆盧膺秀才序・送趙大秀才往江陵序
卷十七 序中	送從弟謀序・送澥序・送徐從事北遊序・送桂州杜留後序・送李判官往桂州序・送寧国范明府序・送薛存義序・送薛判官量移序・送易師楊君序・送巽上人赴中丞叔父召序・送僧浩初序・送琛上人南遊序・送元暲師序・送内弟盧遵遊桂州序・送從兄偁序・送楊凝郎中使還汴宋後序・送蔡秀才序・送廖有方序・送嚴秀才序・送濬上人歸淮南序
卷十八 序下	送婁圖南遊淮南序・送呂讓序・送崔九策序・送韋七秀才序・送南涪州量移澧州序・送崔羣序・送韓豐後序・送蕭鍊序・送元秀才序

外集	非国語下	卷三十二	非国語上	卷三十一	啓	卷三十	啓	卷二十九	状
服表・爲劉同州謝上表・賀踐祚表・賀赦表・爲楊湖南謝設表・爲師詩・爲崔中丞賀平李懷光表・爲京兆府賀雨表・謝端午賜綾帛衣					諸州賀啓・上嶺南鄭相公啓	上揚州李相公啓・謝李相公示手札啓・寄趙江陵啓二首・上湖南李中丞啓・上李中丞所著文啓・謝李中丞啓・上嚴東川啓・寄桂州李中丞薦盧遵啓・上大理崔少卿啓・與邕州李中丞啓・上裴晋公獻唐雅詩啓・上襄陽李僕射啓・上廣州趙尚書啓・上西川武相公啓・上襄陽李尚書啓・上江陵嚴司空啓・上河陽烏尚書啓・賀裴桂州啓・上裴行立中丞撰訾家洲啓・與衛淮南石琴薦啓・答鄭員外賀啓・答	管黃家賊事宜狀	進農書狀・讓監察御史狀・爲崔中丞上宰相狀・代人進磁器狀・爲南承嗣請從軍狀・爲京畿父老上宰相狀・爲京畿父老上府君狀・爲京兆府訴早損狀・上戸部狀・柳州上本府狀・上中書門下狀三首・上裴相狀・爲廣南鄭相公奏百姓產三男狀・爲浙東薛中丞奏五色雲狀・柳州舉自代狀・爲南承嗣乞兩河効用狀・爲裴中丞乞討黃賊上裴相狀・柳州上中書門下狀・爲裴中丞伐黃賊轉牒・爲裴中丞奏邕管黃家賊事宜狀	・送幸南容歸使聯句序・送苑論序・送辛殆庶序・送班孝廉序・送獨孤申叔序・送獨孤書記序・凌助教蓬屋題詩序・送文暢上人序・送賈山人序・送辛生序略・送李渭序・送文郁師序・送方及師序・送玄舉師歸幽泉寺序・序棋・序飲

後序・跋	武中丞謝賜櫻桃表・爲裴令公舉裴冕表・謝賜時服表・爲武中丞謝賜新茶表・爲韋侍郎除寶群表・賀祈雨有応表・禮部賀白鵲表・禮部賀甘露表・京兆府賀嘉瓜白兔表・禮部賀嘉瓜表・賀白龍青蓮等表・賀答歡蓮花表・賀雨表三首・禮部賀嘉禾芝草表・御史臺賀嘉禾表・爲樊左丞讓官表・爲裴中丞謝討黃賊表・又舉人自代伐黃賊表・爲柳公綽謝上表・代李愬襄州謝上表・代節使謝遷鎮表・代裴行立謝移鎮表・代嶺南節度舉裴中丞自代表・奏薦從事表・賀皇太子牋・代広南節度使謝出鎮表・上宰相啓・上裴桂州狀
後序・跋	韓愈「柳子厚墓誌銘」・韓愈「祭柳子厚文」・韓愈「柳州羅池廟碑」・柳子厚先生伝〔『新唐書』所収〕 葉程の乾道元年（一一六五）の後叙・趙善愷と錢重の紹熙二年（一一二〇八）の跋・汪楫の嘉定改元（一一二〇八）十月の跋

上記の表における巻数とその部類及び所収作品は、現行の正集四十五巻本のそれと大きく変わっており、柳宗元集の源流の様相を呈している。その異同の詳細については前掲戸崎氏論文に詳しい。

後序等については、葉程の乾道元年（一一六五）の後叙と趙善愷・錢重の紹熙二年（一一二〇八）の跋は容易に見られるが、汪楫の嘉定改元（一一二〇八）十月の跋は知られていない。以下のようにある。

柳河東之文雄深雅健、昌黎韓公固嘗評之矣。由唐迄今、數百載傳習既久、不無訛舛。自河南穆伯長隴西李之才、以古學倡天下參讀訂正遂得其真。柳侯來零陵最久、凡山水奇秀、居處清絕、必於其文發之。故其文之奇古精緻、載於集中者、多零陵所作也。楫到官之初、謁愚溪祠、退而訪其遺文、得公庫旧集、日累月益、墨版蠹蝕、字體漫滅。至讀者有以倅為倅、以邁為遇者、因委新春陵理掾朱君敏、集諸家善本、校讎之、更易朽腐五百餘版、釐革訛舛幾數百字。半葺而工役成、庶可以伝遠。或尚有缺漏、博古君子能嗣而正

之、抑斯文之幸也。嘉定改元十月 日郡守鄱陽汪檝跋。

来歴については、拙稿「静嘉堂文庫所蔵宋版『唐柳先生文集』残巻について」(『東方学』一二二号、二〇一一)・前掲戸崎氏論文に詳しい。正確な記録としては、澁江全善(一八〇五〜一八五八)・森立之(一八〇七〜一八八五)の『経籍訪古志』に、賜蘆文庫に全十巻が存在していたことが記されており、新見正路(一七九一〜一八四八)の『賜蘆書院儲蔵志』には、弘化元年(八四)には既に『静嘉堂蔵本』と『文化庁蔵本』に分かれていたことが記されている。その後、『静嘉堂蔵本』は、竹添光鴻・松方文庫と所有者を変えていき、一方の『文化庁蔵本』は、浅野梅堂(一八一六〜一八八〇)の漱芳閣に移ったことが『寒檠瓊綴』に記されており、漱芳閣に移ってから後、巡り巡って古書店の山本書店に、そして文化庁に帰している。ただし、『文化庁蔵本』には「不忍文庫」の印記があり、屋代弘賢(一七五八〜一八四一)が所蔵していたことが分かる。戸崎氏は賜蘆文庫より前に不忍文庫に所蔵され、既に『静嘉堂蔵本』と『文化庁蔵本』に分かれていたとされるが、上記のごとく記録と一致しない点もある。現状ではいつの時点で不忍文庫に存在したか不明である。また、賜蘆文庫において『文化庁蔵本』と五山版『新刊五百家註音弁唐柳先生集』の本文を校勘した者がおり、その校勘を記した五山版『新刊五百家註音弁唐柳先生集』が宮内庁書陵部に所蔵されている。

清水茂氏の前掲論文では『静嘉堂蔵本』を対象として、拙稿では『文化庁蔵本』と校勘した五山版『新刊五百家註音弁唐柳先生集』の書き入れを対象として、部類ごとの作品の出入り、作品の配列順序、本文における字の異同等を検証している。どちらの論でも、宋版『唐柳先生文集』の方が本来の姿を残しており、柳宗元を研究する上で貴重な価値を有していると結論する。

②『重校添註音弁唐柳先生文集』(宋版)

東京大学東洋文化研究所に巻九のみ所蔵され、関西大学図書館所蔵に巻十のみ所蔵される。巻九は第一葉表・第一〇葉裏・第一一葉表闕。巻十は第二十一葉まで存在し、以下闕。台湾国立中央図書館に完本が所蔵され、その複製本(台湾国立中央図書館善本コレクション)が京大人文学部研究所に所蔵されている。鄭定が嘉定年間(一二〇八〜一二二四)に刻刊。正集四十五巻外集二巻より構成される。本文と注は『五百家注唐柳先生集』と変わらないが、重校、添注されている。本文の諸家注の後に「重校」と明記して字句の異同を示し、また「添註」と明記して新たな註を加えている。黄丕烈は『蕘圃蔵書題識』の中で、本書を高く評価している。

新海一氏「鄭定輯註本『重校添註音弁唐柳先生文集』札記」(『柳文研究序説』所収)によると、諸々の柳宗元集と鄭定輯註本(完本)とを校勘し、その結果「鄭定は(増広注釈)系の本に敏感である。廖瑩中の手柄ではなく、鄭定の努力が大いに与っている。かれは同時に英華本や唐文粹にも留意しているし、われわれが今日実見できぬ柳文の善本、北宋刊本のいわゆる蜀本をかなり蒐集していたであろうことを物語る」と述べられ、黄丕烈の評価を妥当とする。

また、近年、戸崎哲彦氏が「南宋鄭定刊『重校添註音辯唐柳先生文集』考(上)(下)」(『島大言語文化』四二号・四四号、二〇一七〜二〇一八)の中で、台湾中央図書館に端本も含めて三本、広東省博物館・北京図書館・南京博物院にそれぞれ端本が存在すること、柳宗元集諸本との関係について論じている。

③『唐柳先生集』(朝鮮版)

国立公文書館所蔵。十二冊。正集四十三巻・別集(非国語)二巻・外集二巻・新編外集一卷・別録一卷・年譜一卷で構成される。編者は崔万理、朝鮮版で明・正統四年(一四三九)刊行。後跋には次のようにある。

唐韓柳氏所著文章、雄偉雅健、傑立宇宙、実萬世作者軌範也。是以朱文公

嘗語後生曰、若將韓柳文熟讀、不到不會做文章。然二書皆文深字奇、註解無慮數百家、而盛行于世者、韓有二本、朱子校本、字正而註略、五百家註本、註詳而字訛。柳亦有二本、其増広註積音弁、又不如五百家之詳也。讀者就此較彼、未易領會。正統戊午夏、殿下命集賢殿副提學臣崔萬理、直提學臣金鑣、博士臣李永端成均、司藝臣趙須等、會粹為一、以便披閱。韓主朱本、逐節先書考異、其元註入句未斷者、移入句斷。五百家註及韓醇註訓、更采詳備者、節附考異之下、白書附註以別之。柳主増註音弁、亦取五百家註・韓醇註訓詳備者増補、句暢其旨、字究其訓。開卷一覽、昭若發矇。既徹編以進、令鑄字所印布中外、爰命臣秀文、跋其卷後。臣伏覩殿下、以緝熙聖學、丕闡文教、凡諸經史、悉印悉頒。又慮詞體之不古、發揮二書、嘉惠儒士、使之研經史以咀其美、追韓柳以擲其華、其所以右文育材者、可謂無所不用其極矣。將見文風益振、英才輩出、煥然黼黻太平之業、而我國家文物之盛、炳耀千古也無疑矣。正統四年冬十一月日、朝散大夫集賢殿助教藝文庶子教習教經筵檢討官兼春秋館記注官臣南秀文拜手稽首敬跋。

これによれば、朝鮮では『増広註積音弁唐柳先生集』（以下『音弁本』と略称）と『五百家註音弁唐柳先生文集』（以下『五百家注本』と略称）の二書が流布していた。『五百家注本』の注は『音弁本』よりも詳しいが、読者は二書を読み比べるのは大変であり、内容を理解するのが困難であった。そのため『音弁本』を主にして、『五百家註本』と韓醇の『詰訓唐柳先生文集』の詳しい註解を増補し、句については十分に内容を述べ、字についてはその意味を明らかにし、巻を開けばすぐに分かるようにしたという。実際には『五百家註本』や『詰訓本』等から適当と思われる諸家注を引用しており、崔万理の編集意図がよく体现されている。

本書が成立した時期は、李朝第四代国王世宗（一三九七〜一四五〇）が治めていた時期に当たる。世宗は学問を研究する機関として集賢殿を設置し、有能

な儒学者や官奴を集め、活発に編纂事業を行い、文化振興に努めた。朝鮮文字（ハングル）を創出したことでも知られる。崔万理（？〜一四四五）は編纂事業に関わった一人であり、朝鮮文字の創製に強く反対した人物として知られる。現在、朝鮮版『唐柳先生集』は『柳宗元集校注』『柳宗元大辞典』等に紹介されており、その資料的価値が定まっていない。日本には国立公文書館に所蔵されているのみであり、貴重な存在である。

（二）中国から移入し、日本で書写、出版された柳宗元集

日本に移入した柳宗元集をそのまま書写したおかげで今日まで残っている鈔本が存在する。また、印刷技術が発達し、当時期に最も主流だった柳宗元集を日本で刻刊することによって、今日まで残っている版本が存在する。主だったものを以下に取り上げる。

④『増広註積音弁唐柳先生集』（鈔本・四十五巻本）

蓬左文庫蔵。鈔本（以下『蓬左文庫音弁本』と略称）。全十二冊。正集四十五巻、外集二巻、附録一巻で構成される。「御本」「君山」の印記有。宋代の避諱字（慎・匡・恒・弘・公・完・貞・敦の字等）を欠筆。

書写状況について、巻四十三末に朱書で次のように書かれている。

此詩兩卷漏。談後移朱点而已。正和元年十一月九日志於武州金沢之学校。

近江州人事聡達行年三十三。

また附録末の奥書には次のようにある。

正和元年十月三日、講畢。遺四十二三之巻。（朱書）

正和元年九月廿七日、於武州六浦金澤学校書写畢。但中間四十二三遺之。

追可書歟。江州貫人破僧聡達、行年三十三、誌之。（墨書）

附録末の奥書は二度にわたって書き記されている。まず墨書で、正和元年（一三二二）九月二十七日に聡達なる僧が武蔵国の金沢学校において書写し終わるが、巻四十二と四十三は残っており、後に追記する必要を言う。次いで朱書で、十月三日に講義を終えたが、巻四十二と四十三を書き記していないとする。さらに、巻四十三末を見ると、十一月九日、両巻の訓点を書き記し終わったとあり、本書が成立したことを伝えている。

『増広註釈音弁唐柳先生集』（『音弁本』）は、紹熙三年から五年（一一九二～一一九四）に成立したと言われる。幾種か版が存し、最も利用されるのは『四部叢刊初編』に収められている元刻本（涵芬楼蔵）の影印（以下『四部叢刊音弁本』と略称）である。拙稿「蓬左文庫所蔵鈔本『増広註釈音弁唐柳先生集』について」（『中国文史論叢』第八号、二〇一二・三）では、『蓬左文庫音弁本』と『四部叢刊音弁本』を比較し、『蓬左文庫音弁本』の特徴を述べている。以下、その概略を述べる。

構成面に着目すると、両者は次の表のように異なる。

『四部叢刊音弁本』	陸之淵「柳文音義序」↓劉禹錫「唐柳先生文集序」↓諸賢姓氏↓目録↓正集四十三卷↓別集上下巻（非国語）↓外集上下巻↓附録
『蓬左文庫音弁本』	劉禹錫「唐柳先生文集序」↓陸之淵「柳文音義序」↓潘緯「柳文音義序」↓劉欽「河東柳先生文集後序」↓諸賢姓氏↓柳先生年譜↓不明氏「年譜後序」↓目録↓正集四十五巻↓外集上下巻↓附録

*正集四十五巻に『非国語』二巻が含まれる。
*巻二に「披沙揀金賦」「迎長日賦」「記里鼓賦」が収められている。

両者を比較して明らかなのは、『蓬左文庫音弁本』では『非国語』二巻を含めて正集四十五巻としているのに対し、『四部叢刊音弁本』では『非国語』二巻を別集とし、正集四十三巻としている点である。宋代には正集四十三巻本と

正集四十五巻本が混在していたようである。現在、『音弁本』は正集四十三巻本が主流であり、正集四十五巻本の版本はきわめて少ない。北京大学の李木斎先生（李盛鐸）蔵書に一本確認されるのみである。

また、『蓬左文庫音弁本』には、「披沙揀金賦」「迎長日賦」「記里鼓賦」の三賦が外集だけでなく巻二にも書写されている。『四部叢刊音弁本』では外集に掲載されるのみである。『蓬左文庫音弁本』では書写者・聡達が全体を把握せずに書写したのであろう。巻二では、「増広註釈音弁唐柳先生集巻之二」で一旦終わりながら、その後に三賦が存する。次いで、さらに「音註唐柳先生文集巻第二」として、書写者が次のような書き入れを施している。

増広註釈音弁本無披沙揀金迎長春日記里鼓之三賦。今以音註本而写加之。
音註目錄云、今躡賦三首云々。

これによれば、親本の宋版『音弁本』が三賦を巻二に所収していないにもかかわらず、書写者の判断で、『音註唐柳先生文集』の巻二によって、この箇所書き加えている。巻二の三賦では、いずれも難読字の反切が記されている。残念ながら、三賦以外の『音註唐柳先生文集』の作品が無いので、書写者が依拠した『音註唐柳先生文集』が誰の手によって編集されたものか定かではない。

次いで、序文面に着目すると、前表のように『蓬左文庫音弁本』には、潘緯の「柳文音義序」・劉欽「河東柳先生文集後序」・柳先生年譜・不明氏「年譜後序」が存するが、『四部叢刊音弁本』には欠く。これらの序や年譜の中で貴重なのは劉欽「河東柳先生文集後序」である。次のようにある。

河東柳子之文、古今之愛重者、亦既多矣。昌黎韓子則言、其雄深雅健、似司馬子長。中山劉子則言、其如繁星麗天、芒寒色正、益人望而敬之者也。

後之覽者、三復二子之言、能愛之重之、会之於心、斯亦足矣。何必置一喙於其間哉。然音積之有正有訛、讐校之、或詳或略、則不可以無弁。今怡堂劉君之、於是編參攷諸説、会其至當、雖不加一辞、而是否之間、瞭然易見。

是豈非能愛之重之、而会之於心也歟。其或以心之所得者、而濟諸人、當不在韓劉二家門弟子之外。淳祐九年歲在巳酉良月朔日。平山劉欽書識。

劉欽が淳祐九年（一二四八）に『河東柳先生文集』に対して述べた後序である。

この序は『柳宗元資料彙編』（中華書局）や『柳宗元集校注』（中華書局）等にも掲載されていない。淳祐九年（一二四八）の序が掲載されていることから、『蓬左文庫音弁本』が親本とした宋版『音弁本』は、必然的にそれ以降に刊行されたことが分かる。『蓬左文庫音弁本』が正和元年（一二二二）に書写されたことを考えると、刊行されるや直ちに日本に移入され、金沢学校に至ったようである。

『蓬左文庫音弁本』と『四部叢刊音弁本』とは、作品の本文に異同が見られる。『蓬左文庫音弁本』の本文の方が、現在通行する『柳宗元集』（中華書局）底本『新刊増廣百家詳補註唐柳先生文集』の本文と一致する場合が多いことから、『蓬左文庫音弁本』の方が、『四部叢刊音弁本』より適切な本文を備えていると言えよう。

なお、拙稿で『蓬左文庫音弁本』の親本とも言える宋版が北京大学図書館に所蔵されている可能性を示唆したが、戸崎哲彦氏は、その北京大学蔵本を實際に調査され、「南宋淳祐九年劉欽序劉怡堂輯註『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十五卷12行本考」（『島大言語文化』三三号、二〇一二・一〇）で、柳宗元集の諸本との関係について論じている。氏は『音弁本』の輯註者が劉怡堂とする説を打ち立てている。

⑤『新刊五百家註音弁唐柳先生文集』（日本南北朝五山版）

内閣文庫・国会図書館・書陵部を始めとして多くの機関で所蔵される。首一卷（序伝目録）、正集四十五卷、龍城録二卷、附録二卷で構成される。龍城録二卷と附録二卷が存するのは龍谷大学所蔵本である。

本書の価値について、拙稿「五山版『新刊五百家註音弁唐柳先生文集』について——五山版の再検討をめぐって——」（『文学』一二巻第五号、二〇一一）に詳しい。以下にその要略を示す。巻四十五末の刊記には次のようにある。

祖在唐山福州境界。福建行省興化路莆田縣仁德里台諫坊住人兪良甫、久住日本京城阜近、幾年勞鹿、至今喜成矣。歲次丁卯仲秋印題。

「勞鹿」は、莆田県の方言で「勞碌」「勞累」に当たり、苦勞して働くという意味である。中国から渡来した刻工・兪良甫が、何年もかけて苦勞して「丁卯」、嘉慶元年（一七八七）に京都嵯峨において刊行したことが分かる。

鎌倉末期から室町末期にかけて、京都五山などの禪僧によつて禪籍・語録・詩文集・経巻などの多くの書目が刊行された。それらの書を総称して「五山版」という。五山版を刊刻したのは、大陸から渡来した刻工者であり、刊記に見える兪良甫もその一人であった。兪良甫の名は他にも『碧山堂集』『白雲詩集』『伝法正宗記』の刊記に見え、大陸で「学士」を授けられていることから、学識を有する者だったことが察せられる。

中国において書名に「五百家註」を冠した柳文注釈書に、四庫全書に所収される宋版『五百家註唐柳先生文集』（以下『四庫全書五百家註本』と略称）と北京図書館に所蔵される『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』（以下『北京図書館五百家註本』と略称）がある。『四庫全書五百家註本』は、魏仲拳が慶元六年（一一二〇）に刻刊。正集四十五卷・新編外集三卷・龍城録二卷・附録四卷より構成されるが、巻二十二から巻四十五を欠く。『北京図書館五百家註本』は巻十六く二十一と巻三十七く四十一が現存し、現在、北京図書館再造善本によつて容易に見ることが出来る。

従来、清水茂氏が「日本留下来の兩種柳宗元集版本」（『香港大學馮平山圖書館金禧紀念論文集』一九八二年）の中で、『五山版五百家註本』は、『四庫全書五百家註本』の覆刊であり、『四庫全書五百家註本』が巻一から巻二十一まで

しか存在しないのに対し、卷四十五までを完備していることを指摘したことから、『五山版五百家註本』の重要性が注目されてきた。しかし、岳珍氏が「柳集五百家注愈良甫翻宋本考述」（『典籍与文化』二〇〇九総第六八期）の中で、『五山版五百家註本』を『四庫全書五百家註本』と校勘すると多くの異同が存在するのに対し、『北京図書館五百家註本』の一葉当たりの行数、各行の字数、諸註の配置が『五山版五百家註本』と同じであり、字の異同もないことから、『五山版五百家註本』は『北京図書館五百家註本』を忠実に翻刻したものだと言証した。そもそも『四庫全書五百家註本』には書名に「新刊」の二字がない。

これによって、『五山版五百家註本』は『北京図書館五百家註本』の覆刊という説で問題が無いように見える。しかし、前掲拙稿の中で、実際に『五山版五百家註本』を『北京図書館五百家註本』と校勘すると、本文の異同が見られる他、『五山版五百家註本』にしかない注が存在し、それらがすべて『増広註釈音弁唐柳先生集』の本文・注と一致することを指摘した。刻工の愈良甫は、『五山版五百家註本』を刻するにあたり、『北京五百家註本』を覆刊の原本にしながらも、適宜『音弁本』を校勘に用いて本文を改訂し、場合によっては有益と思われる注釈を『五山版五百家註本』に付与したのであろう。つまり、『五山版五百家註本』は、愈良甫刊刻の日本独自の版本と行うことができる。

『五山版五百家註本』は刊行された後、禅林において流布し、江戸に入ってから寛文四年（一六六四）に蔣之翹注『唐柳河東集』が覆刊されるまで、人間で重宝された。国立公文書館所蔵『五山版五百家註本』は、その奥書に「壬寅四月十日、終滴研之点。誠有功乎柳文者也。謂之善本亦得矣。于時余弱冠年也。信勝」とあり、林羅山（一五八三〜一六五七）の手沢本であったことが知られる。その書は現在、国立公文書館デジタルアーカイブで閲覧することができる。また国立国会デジタルコレクションでも『五山版五百家註本』の画像を見ることが出来るほか、『日本五山版漢籍善本集刊』でも、その影印を見るこ

とができる。

⑥『唐柳河東集』（蔣之翹注『唐柳河東集』覆刊・石齋鶴飼先生訓点）

読柳集叙説一卷、正集四十五卷、唐柳河東集遺文一卷、唐柳河東外集二巻で構成される。明崇禎年間（一六二八〜一六四四）、蔣之翹（一五九六〜一六五九）が注した『唐柳河東集』を覆刊する際に、鶴飼石齋（一六一五〜一六六四）が訓点を施した書。寛文四年（一六六四）に京都の秋木屋平左衛門が刊行し、その後『唐韓昌黎集』と合印され、中江久四郎が刊行した。

蔣之翹注『唐柳河東集』は、読柳集叙説一卷、正集四十五卷、唐柳河東集遺文一卷、唐柳河東外集五巻、附録一卷で構成される。この構成は、蔣之翹が新たに施した編次である。従来の集注本に、何良俊・帰有光・唐順之・茅坤・王世貞・胡応麟等の注や評を加えた、明代を代表する柳宗元集である。

寛文四年版『唐柳河東集』と明版『唐柳河東集』とを比較すると、明版は当然のことながら白文（漢字のみの文章）であるのに対し、寛文四年版は訓点（読む順序を示す返り点と読み方を示す送り仮名）が施されている。訓点を施すことによって、日本人が読む漢字の順序や意味が分かるため、柳宗元の作品を読解する上で非常に有益であり、その受容に大いに役立った。一方、明版は外集五巻・附録一卷であるのに対し、寛文四年版は外集二巻しかない。巻三〜五及び附録を覆刻しなかった理由については定かではない。

鶴飼石齋は、名は信之、字は子直、号は心耕子・石庵・貞節。江戸に生まれ、二十歳前後で京都に遊学し、藤原惺窩の高弟・那波活所に学んだ。林羅山に師事したとする説もある。正保三年（一六四六）、尼崎藩主青山幸利に仕え、侍講として藩主・藩士に講義した。万治三年（一六六〇）に致仕して上洛、京都油小路で私塾を開いて門人を育成した。三代より多くの訓点本・訓校本・著作を手がけ、その数は三一種六七三巻にのぼる。

現在、寛文四年刊『唐柳河東集』は、汲古書院刊行の『和刻本漢詩集成』の中に収められており、比較的容易に見ることができ、日本人の柳宗元研究において大いに利用されている。

⑦『柳文』(游居敬校『柳文』覆刊)

正集四十三卷、別集(非国語)二卷、外集二卷、附録で構成される。明版・游居敬校『柳文』の覆刊。天保十年(一八三九)に刊行、安政四年(一八五七)に重刊された。江戸時代に昌平坂学問所が刊行した書物のことを「官版」と呼び、『柳文』もそれにあたる。同じく游居敬校『韓文』と合刻。

明版『柳文』は、明嘉靖十五年(一五三六)に、南平県(現福建省南平市)の游居敬(一五〇九〜一五七一)が校正を行い、刊行した書である。葉德輝(一八六三〜一九二七)は『書林清話』巻五で游居敬が刊刻したこの書と『韓文』を高く評価している。しかし、この書は、杉山精一氏の『官版書籍解題略』の『韓文』に「明嘉靖中游居敬箋釈ヲ省キ正文ノミヲ校刻」(『柳文』には「韓集ト同シク居敬力刻スル所ナリ」とあるように、四部叢刊所収『増広注釈音弁唐柳先生集』から注釈の箇所を削り取っただけで、游居敬が校正した箇所はそれほど多くない。

現在、日本において刊行された『柳文』は、国立国会図書館・国立公文書館をはじめ、多くの機関に所蔵されている。

⑧『唐柳先生新編外集并年譜』(朝鮮版崔万理編『唐柳先生集』覆刊)

唐柳先生新編外集一卷、唐柳先生年譜一卷で構成される。大島桃年校訂。嘉永二年(一八四九)刊。全文に返り点が施されている。新編外集には「墓誌」として「故連州員外司馬凌君墓後誌」「万年県丞柳君墓誌并序」「處士段弘古墓誌」「潞州兵曹柳君墓誌」「永州司功参军譚隨亡母毛氏誌文」を配列し、韓醇の

「柳文後記」を収める。唐柳先生年譜に次いで、大島桃年の跋文が次のようにある。

按四庫全書総目、唐柳先生文集四十五卷、外集二卷、新編外集一卷、附録二卷。余旧蔵朝鮮活字版柳文外集。其編目與四庫総目合。別有年譜一卷。而世所通行蔣之翹校本、除外集二卷外、新編附録俱闕。其外集二卷、亦分上卷充其數、而下卷全闕。刊刻柳文、則下卷附録皆具。而仍闕新編年譜、今以蔵本上梓。以補二本之闕、意世自有完本。但遠境難於搜索、姑印數本遺之社友云。嘉永己酉冬十月加藩大島桃年識。

これによると、大島は四庫全書に所収される『詒訓柳先生文集』が正集四十五卷・外集二卷・新編外集一卷・附録二卷であることを指摘し、自身が所有する③の朝鮮版『唐柳先生集』と編目が同じであり、別に年譜一卷が存するという。当時日本に流布していた⑥の石齋鵜飼先生訓點『唐柳河東集』は、外集二卷を存するが、その外集二卷は『詒訓柳先生文集』の外集上卷の部分を収めるに過ぎない。つまるところ、⑥の石齋鵜飼先生訓點『唐柳河東集』は『詒訓柳先生文集』の外集下巻と新編外集と附録を欠く。そして⑦の官版『柳文』は、『詒訓柳先生文集』の外集下巻と附録を備えている。総じて見ると、新編外集と年譜を欠いていることになる。そのため自分の所蔵する③の朝鮮版『唐柳先生集』の新編外集と年譜を用い、それを板木に彫って刊行し、これまで見ることのできなかった新編外集と年譜を見ることができるようにしたという。

現在、金沢市立玉川図書館近世史料館に大島の稿本と板木と版本が残っており、稿本には「学問所改」の印が押してある。「学問所改」の印があるということは、昌平坂学問所の承認が得られたことを意味する。そして国立公文書館には昌平坂学問所に所蔵されていた崔万理が編した朝鮮版『唐柳先生集』(四十三卷、別集二卷、外集二卷・新編外集一卷・別録一卷・年譜一卷)が残されている。すでに新海一氏が「柳文校勘試論―凌準の死をめぐる―」で、『唐

柳先生新編外集并年譜』と朝鮮版『唐柳先生集』の字句が一致することを指摘していることから、国立公文書館に所蔵されている朝鮮版『唐柳先生集』は、もと大島が所有していたと見て間違いないであろう。

大島桃年（一七九四〜一八五三）は、字を景實、初め藍涯と號し、後に柴垣と改める。昌平坂学問所に学び、時に大槻磐溪（一八〇一〜一八七八）と親交を深める。文政五年（一八二二）加賀に帰り、明倫堂助教となる。前田齊泰（一八一〜一八八四）より諸書の校刻を命じられ、その力量を發揮し、齊泰の期待に応える。桃年の学問・修養の場所を「催詩楼」と呼び、自身が記した「催詩楼記」は頼山陽に絶賛された。

現在、『唐柳先生新編外集并年譜』は、国立国会図書館・国立公文書館をはじめ、多くの機関に所蔵されている。

（三）日本で創出された柳宗元集

柳宗元集の受容が深化すると、日本人が独自の注釈・解釈をするようになり、それらを集めた新たな柳宗元集を創出することになる。ここでは、日本人の手によって創出された柳宗元集を取り上げる。

⑨ 建仁寺兩足院所蔵『柳文抄』

南北朝時代から戦国時代（場合によっては江戸時代も入る）にかけて、禅林・博士家・神道家・医家・足利学校などで製された、漢籍・仏典・国書に対する注釈書のことを「抄物」という。中世禅林において柳宗元集に対しても「抄物」が書かれた。

『柳文抄』は、現在、建仁寺兩足院と尊経閣文庫に所蔵されている。建仁寺兩足院所蔵の『柳文抄』（以下、「兩足院本」と呼称）は、全六冊。「兩足院

の朱印有り。正集四五卷の内、卷十四・卷三十九・卷四十四・卷四十五に対する抄を欠く。第六冊の奥書に「永祿第八乙丑十月朔日書写之了。禅昌院繼天首座本借用。宗二十六八歳。不休庵書之。」とあり、永祿八年（一五六五）、林宗二（一四九八〜一五八一）が六十八歳の時、禅昌院の繼天寿叟（一四九五〜一五四九）が生前に所有していた本を借用し、不休庵において書写したことが分かる。

尊経閣文庫所蔵の『柳文抄』（以下、「尊経閣本」と呼称）は、全十三冊。「金澤学校」と「㊦」の印有り。兩足院本と比較すると、同様に卷十四・卷三十九・卷四十四・卷四十五に対する抄を欠き、詩の配列や抄文がほぼ同じであることから、尊経閣本が兩足院本を書写した可能性が高い。

『柳文抄』は、漢字・仮名交じりの文章で書かれた仮名抄と漢字のみで書かれた漢文抄の二つの抄をあわせて成立しており、それぞれの抄で抄者（注釈者）が異なる。

仮名抄には、「旧」と略表記されている抄・太白真玄（？〜一四一五）の抄・江西龍派（一三七五〜一四四六）の抄・瑞溪周鳳（一三九一〜一四七三）の抄・歴代禅僧の抄・「私」こと天隱龍澤（一四二二〜一五〇〇）の抄が見られる。中心をなすのは、江西龍派の講抄であり、さらに多くの禅僧の講義及び講抄を採録し、最後に天隱龍澤の見解を記したものが仮名抄であると言えよう。この仮名抄は、巻一より巻三十八まで存し、『五百家注本』の作品配列によっている。

漢文抄は、惟肖得巖（一三六〇〜一四三七）の講義録を中心として、太白真玄の抄、瑞溪周鳳の抄を採録し、「愚謂」とある抄者の抄を記したものである。漢文抄は卷十九「尊勝幢贊（并序）」より仮名抄に加わり、『柳文抄』の中で「別抄」と称されている。卷四十以降は漢文抄のみ存在し、卷四十二と卷四十三については巻の全作品を一通り注釈した後、巻の最初の作品に戻り全作品をも

う一度注釈している。この漢文抄は、最初に巻十九から巻四十三までが『音弁本』を底本に用いて注釈され、その後、巻四十二と巻四十三については、再度『五百家本』を底本にして注釈されている。それぞれの講義で用いた底本が異なっていたことが窺える。

瑞溪は様々な書から抜粋した『刻楮集』二百巻を編しており、天隱龍澤は『刻楮集』二百巻を更に抜粋して五十四巻にした『刻楮』を編している。天隱『刻楮』には瑞溪『刻楮集』目録が残されており、その目録には巻五十三から五十五が『柳抄』、巻八十四から八十九が『柳文口義』となっている。『柳文抄』の編纂者であるが、巻十七の巻頭に「柳文刻楮抄第十七」とある。瑞溪の柳文解釈そのものように見えるが、「私」「愚」（天隱龍澤）の称があるため、その判断は正しくない。編纂者（天隱龍澤）の瑞溪講義の聞書、あるいは瑞溪『刻楮集』から抜粋したものと考えるのが妥当であろう。

『柳文抄』は天隱から学芸上の門生・月舟寿桂に伝わり、さらにその法嗣・継天寿猷（親本所有者）に伝わっていったのではあるまいか。両足院に縁の深い林宗二（『柳文抄』書写者）は、建仁寺に住した継天と交流があり、『柳文抄』の存在を知っていたのであろう。

『柳文抄』「序」に、「日本へハ音辯本方最初ニ来。其後五百家来カ、五百家ニハ孫注カワルイ事ヲシタ。近比音義本来、此ハ重宝也。音辯本ハ无用也」とあり、日本禅林には『音弁本』が最初に伝来し、続いて『五百家本』『音義本』が伝来したらしい。仮名抄と漢文抄とで底本が異なるが、禅僧が柳文を理解するときには、『五百家本』『音弁本』『音義本』が中心となる参考書であり、三書の注釈に基づいて解釈している。

『柳文抄』は日本における最初の柳文注釈書であり、貴重な価値を有するも、従来柳宗元研究の中で顧みられたことはない。『柳文抄』の一篇一篇を詳細に吟味してゆけば、これまでになかった新鮮な解釈が含まれている可能性がある

はずである。

現在、臨川書店より『柳文抄』が刊行され、両足院所蔵本を影印で見ることが出来る。上記の内容は、その解題である拙稿『『柳文抄』について』に拠っている。

⑩ 近藤元粹『柳柳州詩集』

四巻、詩話一巻で構成される。明治三十三年（一九〇〇）刊行。巻頭に邵経邦による柳宗元の伝「弘簡録文翰伝」（『弘簡録』巻五十四）を所収。巻一には「奉平淮夷雅表」「唐鏡歌鼓吹曲十二篇」「貞符并序」「視民詩」を収め、巻二には正集四十五巻本中の巻四十二・巻四十三の配列順序で、「同劉二十八院長寄澧州張使君八十韻」から「柳州寄丈人周韶州」までを収め、巻三には「登柳州岷山」から「戲題石門長老東軒」までを収め、巻四には「茆簷下始栽竹」から「春懷故園」までを収める。その後、柳宗元詩に関する詩話と王孟章柳に関する詩話を収める。

巻一から詩話に至るまで、頭書に近藤元粹の柳詩を詩として味わい吟味する評語、及び蔣之翹・劉辰翁等の評語、そして他書と校勘して適当とする字の異同を記し、詩句には返り点を施し、注意すべき語句や詩句に圈点を書き入れている。

近藤元粹（一八五〇～一九二二）は、愛媛県松山の人。名は元粹、字は純叔、号は南洲・蛭雪軒という。初め藩校の明教館に入り、藤野海南に従う。後、芳野金陵に就いて漢学を学ぶ。江戸へ遊学した後、帰郷して明教館の助教授となる。明教館の廃止に伴い、二十七歳で大阪に居を移し、「猶興書院」を開き、子弟を教育して学問を広めた。四十六歳で京都に赴き、皆川淇園を師事して文筆の業に従事するも、八年後、門人の懇請により大阪に帰り、「風騷吟社」を起し、多くの諸生を教えた。文に長じ、詩書をよくし、著書に『箋註十八史

略』『増註小学纂要』『日本政記訓纂』『日本外史講義』等、多数ある。
現在、『柳州詩集』は、国立国会図書館をはじめ、多くの機関に所蔵されている。

(四) 日本の書物に書き記された柳宗元集

日本の漢籍の中には、訓点・字句の異同・その書には載っていない注釈・独自の見解等、読解に必要なことが本文以外の余白に書き込まれている書が屡々存する。それらの書き入れの中に柳宗元集の貴重な資料が見られる場合がある。

⑪劉辰翁評点（書き入れ資料）

各機関に所蔵される『五山版五百家註本』の中には、膨大な量の注釈が書き入れられているものが存在する。拙稿「日本中世禅林における柳宗元詩受容の側面―五山版の書き入れをめぐる―」（『中国中世文学研究』六三・六四、二〇一四）では、膨大な量の書き入れられた注釈（以下「書き入れ抄」と略称）の中に現在散逸したとされる柳宗元集の評点があることに言及している。確認しうる範囲では、宮内庁書陵部・国会図書館・国立歴史民俗博物館・東洋文庫・東北大学・内閣文庫に所蔵される『五山版五百家註本』巻四十二・四十三に同様の書き入れ抄が存在する。その書き入れ抄文は『唐詩品彙』に引用される劉辰翁の評点（批語）と一致し、また東北大学所蔵『五山版五百家註本』巻四十二の巻頭に「須溪先生劉會孟評点」、内閣文庫所蔵本にも巻四十二の巻頭に「須溪批点」とあることから、共通する書き入れ抄文が劉辰翁の批語であることが分かる。

批語の書き入れ箇所について、多くの書き入れ抄の中でどれが批語であるか

不明であるが、東洋文庫本には「批云」と明記しており、しかも最も多く批語が書き入れられている。そのため、一覧表には東洋文庫本の書き入れ批語を取り上げた。また蔣之翹注『唐柳河東集』に引用されている批語についても番号に○印を付けて取り上げた。

〈批語一覧表〉

番	巻	詩題	批語箇所	批語
1	42	同劉二十八院長寄	盈缺幾蝦蟆*	批云、以用為蝦蟆大俚。
2	42	澧州張使君八十韻	多容競忤彊*	批云、競字誤、必竟字
3	42	弘農公五十韻	徒恨纏徽長*	批云、二語極怨然可念。
4	42	初秋夜坐贈吳武陵	稍々雨侵竹*	好（批言一二句）。
5	42	晨詣超師院讀禪經	悟悅心自足*	批云、妙處欲不可盡、然去淵 明尚遠。是唐詩中轉換。
6	42	零陵贈李卿元侍御	低昂互鳴悲*	批云、意甚苦、而辭不暢。
7	42	簡吳武陵 古東門行	萬金寵贈不如土*	批云、結得凄切。
8	42	楊尚書寄柳筆因獻 長韻	截玉銛錐作妙形*	批云、拙語。
○	42	過衡山見新花開却 寄弟	題注	劉辰翁曰、酸楚。
9	42	同劉二十八哭呂衡 州兼寄江陵李元二 侍御	不使功名上景鐘*	批云、可歎。
10	42	衡陽與夢得分路 侍御	垂淚千行便濯纓*	批云、可念。
11	42	登柳州峨山	西北是融州*	批云、漸近自然。

26	○	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12						
43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	42	42	42	42						
雨後曉行獨至北池	郊居歲暮	溪居	韋道安	覺衰	覺衰	覺衰	與崔策登西山	與崔策登西山	南礪中題	南礪中題	南礪中題	衡州書迹	段秀才處見亡友呂	柳州城西種甘樹	偶題	柳州二月榕葉落盡	栽松寓興見贈其一	酬賈鵬山人郡內新			
偶此成賓主*	題注	長歌楚天碧*	韋道安*	商頌有遺音*	朋友常共斟*	稍已來相尋*	緩我愁腸繞*	縈迴出林杪*	當與此心期*	遂忘疲*	始至若有得、稍深	亭午時*	秋氣集南礪、獨遊	衡陽往事似分身*	楚客憐皇樹*	榕葉滿庭鶯亂啼*	榮耀將安窮*				
批云、諸詩皆極幽怨、而誦之	得。欲重見自難耳。	劉辰翁曰、境與神會、不由思	重見自難耳。	批云、境語神會不由思得、欲	惜哉、不見其贊。	批云、以子厚傳、此必有奇語。	批云、怨之又怨、而疑於達者。	批云、其最近陶者、然意尤佳。	批云、跌怨動人。	此懷似無著可念。	批云、南礪落句、猶有以自遣、	批云、參差隱約、可盡不可盡。	批云、結得平淡、味乃不可言。	篇蒼然。	批云、精神在此十字、遂覺一	清峭苛整。	批云、子厚每詩起語、如清吏	批云、分身語苦。	批云、皇樹不可語。	批云、其情其景、自不可堪。	批云、經事語別。

39	38	37	36	35		34	33	32	31	30	29	28		27									
43	43	43	43	43		43	43	43	43	43	43	43		43									
楊白花	聞黃鸝	聞黃鸝	放鷓鴣詞	跂烏詞		行路難三首其三	田家三首其二	零陵早春	堂)	異公院五詠(曲講	自衡陽移桂植零陵	種白蕘荷	種白蕘荷	江雪									
茫茫曉日下長秋*	西林*紫樵行當熟	滿眼故園春意生*	同類相呼莫相顧*	努力低飛逃後患*		桃笙葵扇安可當*	農談四隣夕*	殷勤入故園*		忘意聊思惟*	一雨悟無學*	眇睺心所親*	血虫化為癘*	獨釣寒江雪*									
惜不令連臂者歌之。	餘音杳杳、真可以泣鬼神者。	批云、語調適與事情俱美。其	批云、西林必其故園。	批云、語調情景皆至。	批云、傷哉。	批云、物異見、欲以常字易之。	批云、亦經事語。	末語跌宕流暢、乃在當字、何	又奇麗飛動、深得樂府之意。	批云、三詩奇麗索意高古。此	批云、無怨之怨。	批云、小絕皆自在精切。	批云、本色道人語。	或自得也。	批云、此語幾不可解、而覽者	事、有致含意、甚悲。	批云、不言蕘荷如何。直以情	批云、五字便盡盡狀。	批云、不言蕘荷如何。直以情	句竟是躡雪千山万逕影、独由	落句五字道尽耳。	蕭然如世外人。同時如退之夢	得、皆不能及也。

40				巖上無心雲相逐*	批云、或謂東坡評此詩、無后二句亦可非知言者也。有可橫截者、如黃鸝四句是也。此詩氣渾不類晚唐、政在后兩句、非蛇安足者。
41	43	詠史	晏子亦垂文*	批云、無叙次、無發明。	
42	43	詠三良	吾欲討彼狂*	批云、坡公治命有從違、亦豈用不厭。	
43	43	詠荆軻	太史徵無且*	批云、結得比叙事較有体。	
44	43	掩役夫張進骸	聊且顧爾私*	批云、三篇皆擬淵明、然不如此篇逼近、亦事題偶足以發爾。故知理貴自然。	

現在、劉辰翁が評点を施した『劉辰翁批点柳宗元集』（仮称）なる書は現存しない。そのため禅僧がいずれの書から抜き出し、『五山版五百家註本』に書き入れたのかを考察するに当たって、まず第一に蔣之翹輯注『柳河東集』や総集『唐詩品彙』からの引用ではないかと考えられる。

『唐詩品彙』に柳宗元の作品が含まれない批語は、1・2・3・8・9・10・14・15・24・28・29・30・31・34・35・36・37・38・41である。『唐詩品彙』に柳宗元の作品は収められているものの、劉辰翁の批語が引用されていないのは、4・6・7・12・26・42である。また、『唐詩品彙』においては、例えば27「江雪」詩では「劉云、得天趣、獨由落句五字道盡矣」、40「漁翁」詩では「劉云、或謂蘇評為當非知言者、此詩氣渾不類晚唐、正在後兩句、非蛇安足者」、44「掩役夫張進骸」詩では「劉云、學陶不如此篇逼近、亦事題偶足以發爾。故知理貴自然」となっており、前掲一覽表の書き入れ批語と大きく異なっている場合が存する。

明末の蔣之翹（一五九六～一六五九）輯注『柳河東集』に引用される批語についてであるが、5・11・13・16・17・18・19・23・32・39・40・43・44において引用するものの、○印の二箇所については、書き入れ抄には見られない批語である。

禅僧が書き入れた四十四箇所にも及ぶ批語は、柳詩批語のほんの一部でしかないにしても、現在のところ、『唐詩品彙』『柳河東集』に収められていない批語は、柳宗元研究にとって新出の資料であり、その資料的価値は高い。五山版の書き入れは日本人の柳文解釈の過程を示す貴重な痕跡であり、決して看過することはできないと言えよう。

まとめ

このように日本に残されている柳宗元集を見ると、鎌倉時代より柳宗元が注目され、その作品集である柳宗元集は高い需要があったことが分かる。①～⑩の柳宗元集は、それぞれに独自の特徴を有し、書写・刊行された当初から多くの人に利用され続けてきた。現代の我々も今一度それぞれの柳宗元集を精査し、その価値を確認した上で、後世の研究に引き継いでいかなければならない。